



2011年1月12日放送

漢方頻用処方解説 加味逍遙散②

大阪大学大学院医学研究科 漢方医学寄附講座 助教 井上隆弥

1) 実際の症例について (文献の紹介)

まずは文献の紹介についてですが、加味逍遙散については、江戸時代から昭和にかけて多数の先生方が記載されています。一般的には更年期障害の第一選択のように言われていますが、実際にはもっと広い範囲で用いられている処方だと思います。

曲直瀬道三先生の『衆方規矩』には「逍遙散に牡丹皮、山梔子を加えて、加味逍遙散と名づく、按ずるに、虚勞、熱嗽（ねつそう）、汗ある者に宜し、兼ねて、以（もつ）て男子五心煩熱し、体瘦せ、骨蒸、婦人癩狂（てんきょう）、月経調（ととの）はざるに、加減を照し、しばしば之を治す」とあり、女性ばかりでなく男性にも加味逍遙散が適応であること、癩狂という精神異常にも用いる事が書かれています。

浅田宗伯先生は『勿誤薬室方函口訣』において「老医の伝に、大便が秘結して快く通じないものには、何病に限らず、加味逍遙散を用いると、大便が快通して諸病も治る」と書かれており、頭部の痛み、顔の熱感、鼻血、婦人の排尿時不快感から皮膚癢痒症、手掌角化症にも応用されていたようです。

大塚敬節先生は血の道症の患者に見られる、のぼせ、頭痛、肩こり、めまい、月経不順、不眠、便秘などに用いた経験を発表されています。中でも頭痛については、『症

候による漢方治療の実際』のなかで、「頭が重いとか、頭に何かかぶさっていると訴えるものによい。女性患者に用いることが多い。加味逍遙散を与えると、大便が気持ちよく出て、肩こりも頭痛もよい」と症例を呈示されています。

また、矢数道明先生も、同じく頭痛の症例に加味逍遙散を処方し、改善させた症例を複数紹介されておられますが、興味深い症例として、本方を柴胡剤として使用され、肝硬変症が劇的に改善した症例を報告されています。

山本巖先生は本方を四逆散の変方として考えられており、月経前症候群から更年期障害、便秘や頻尿、皮膚科疾患にいたるまで、精神的ストレスに起因したあらゆる病態に応用されていたようです。

山田光胤（てるたね）先生は、その使用において特に腹証を重要視されており、軽度の胸脇苦満、瘀血の圧痛、腹部の動悸、心下の振水音を認め、心因性の訴えや月経に問題がある場合には、疾患にかかわらず、肝機能障害であっても、アトピー性皮膚炎であっても治療効果があると言われています。

いずれもご高名な先生方が、ご自身の経験から、使用目標と共に著効例を提示されたものです。症例を提示された時代や病態の認識状況などを踏まえた上で、参考にされてもいいと思います。

2) 薬理効果とその EBM

薬理効果とその EBM についてですが、加味逍遙散は質の高い研究が多くなされており、英文論文も多く出ています。

月経困難症・月経前困難症について

月経困難症、月経前困難症についての研究としては、山田先生は 30 名の月経前不快症の症例に加味逍遙散を 6 周期間投与する事によって、Hamilton Depression Rating Scale (HAM-D) が 50% 以上の改善したものが 63.3% において認められた事を報告されています。

また川口先生は 33 名の月経前症候群患者における加味逍遙散の効果を、(1)精神症状、(2)頭痛、(3)乳房痛、(4)浮腫、(5)下腹痛、腰痛の 5 項目について調べました。その結果、2 周期間の加味逍遙散の内服により 33 症例中 24 症例において症状の改善が認められた事を報告されています。

抗不眠・抗不安作用

抗不眠、抗不安作用の研究としては、卵巣摘出マウスに一定期間、電撃ストレスを加えることで、視床下部でのノルアドレナリンの代謝回転が亢進し、睡眠持続時間が減少する事が分かっています。飯塚先生は加味逍遙散の内服が容量依存的にストレスによって減少した睡眠持続時間を改善させる事を報告されています。

また Mizowaki 先生は、Social interaction 法によって評価した加味逍遙散の抗不安効果は GABA/ベンゾジアゼピン受容体拮抗薬である Flumazenil により拮抗されることにより、加味逍遙散の抗不安作用はベンゾジアゼピン受容体拮抗薬と同様に、GABA/ベンゾジアゼピ

ン受容体を介した作用であると報告されています。

ホットフラッシュ

ホットフラッシュについての研究としては、安井先生は比較試験において、ホットフラッシュを伴った女性患者に対する加味逍遙散の効果を調べ、その結果 IL-8 の数値が有意に低下することを報告されています。

石毛先生は中枢性のホットフラッシュモデルとして卵巣摘出マウスの脳室内に LH-RH を投与する事により、著明な皮膚温の上昇が得られる事を報告されており、同モデルの皮膚温の上昇を加味逍遙散が抑制する事を発表されています。また末梢性のホットフラッシュモデルとして卵巣摘出マウスの静脈内に CGRP を投与することで、著明な皮膚温の上昇が得られる事も報告されており、同モデルの皮膚温の上昇にかんしては当帰芍薬散が抑制する事を発表されています。ホットフラッシュは結果的には末梢血管の拡張に由来する組織血流の増加が原因と考えられていますが、発症原因が異なることで、効果のある漢方薬が異なることを証明した非常に興味深い研究であると思います。

加味逍遙散の原典には抽象的な記載しかありませんが、現代では、各種疾患に対する有効性の科学的根拠が証明されてきていると思います。

3) 自験例

それでは最後に、自験例をお話しさせていただきます。

症例は 36 歳の女性です。主訴は頭痛、月経痛、月経前のイライラで、既往歴に片頭痛がありました。10 年来の痛みで、再燃寛解を繰り返してきました。痛みの部位は側頭部から後頭部にかけての拍動性の痛みで、増悪時には、眼の奥からガンガンとたたかれるような痛みとなっていました。特に月経前後の頭痛はひどく、鎮痛薬を内服しないと寝込んでしまうほどだったようです。産婦人科、歯科、耳鼻科、脳神経外科等を受診されましたが有効な治療法は見つからず、市販の頭痛薬を多量に内服されていました。頭痛の予防療法としては他院にて、抗てんかん薬、抗うつ薬、カルシウム受容体拮抗薬を使用されましたが効果は無く、トリプタン製剤も内服により症状が悪化するようでした。

身長は 168cm、体重は 48kg で色白の方で、問診上、肩こり、胃のむかつき、便秘、イライラ、不眠、手足の冷え等を認められていました。腹診上の所見としては胸脇苦満、瘀血圧痛、胃部振水音があり、脈は沈細、舌診上、薄白苔で舌尖部の発赤を認めました。気血水の異常があると考え、まずは加味逍遙散 (TJ-25) 7.5g/日を処方したところ、約 4 週間の内服で体調の改善と共に、月経痛・頭痛発作回数が半減し、また痛み止めを半分くらいしか使わずにすんだそうです。

ただ、胃のむかつきはあまり改善しなかったため、六君子湯 (TJ-43) 5g を朝夕食間に内服してもらったところ、胃腸の調子もさらに良くなり、胃のむかつきもほとんどなくなりました。その後、月経痛・頭痛も次第に軽減し、最初、加味逍遙散 7.5g であったのが、1 日 5g でよくなり、やがて患者さん自身が加味逍遙散と六君子湯を使い分けられるようになった。

り、頓服的に服用するだけで、コントロールがつくようになり、結局、初診から約1年で廃薬になりました。西洋医学的薬物がまったく効果を示さなかった重症の片頭痛でしたが、漢方薬の内服で劇的に改善した症例であったと覚えております。

加味逍遙散は男女問わず、幅広い応用が可能な処方の一つです。